

天璋院篤姫と法華信仰

長 倉 信 祐

一 はじめに―問題の所在と小稿の目的―

島津斉彬は薩摩藩主に就任した嘉永四年（一八五二）から二年後の嘉永六年三月に、養女として篤姫を島津本家へ迎えた。斉彬は同年四月に江戸薩摩藩奥から老女小野嶋を篤姫の許へ派遣した。筆者は既に斉彬が近衛家や斉彬の実母賢章院の法華信仰を背景として、世子時代から奉公した筆頭老女・大年寄の小野嶋の言上によって、篤姫の御台所入奥の一大事を前に、日蓮宗富士派の法華信仰へ帰依した経緯を述べた。また斉彬の盟友・大叔父の南部信順（重豪末子）も、天保十三年（一八四二）の八戸九代藩主就任以前から奉公した薩奥出身の老女と高野周助を介し、大石寺門流へ帰依した点を明らかにした。

小稿は篤姫の私的な法華信仰をめぐって、万延元年・文久三年の祈禱願と御家人の清水純崎^{すみひで}を中心に、幕末の大奥、薩奥、八戸、尾張、水戸の諸藩に流布した大石寺信仰を一瞥する。

二 篤姫・斉彬の大石寺門流帰依をめぐって

篤姫の大石寺門流への帰依は、およそ嘉永七年に斉彬、信順

が大石寺の曼荼羅を受持した前後に始まる。斉彬が嘉永六年六月に、小野嶋を薩摩へ遣わした史実を踏まえれば、篤姫も嘉永六年六月以降の年内に、大石寺信仰に帰依したことも考えられる。その理由は、同年六月二十日に大石寺五十一世を隠退した日英上人が、万延元年（一八六〇）十月の向島常泉寺御会式での説法講本に「此御方不思議ノ御因縁ニテ當門流御帰依遊ハサレ八ヶ年以来江戸御下関」（品川妙光寺蔵『時々興起留』）と篤姫が嘉永六年八月に薩摩を離れてから、万延元年に至る「八ヶ年以来」大石寺の信仰へ帰依したことを回顧しているからである。

嘉永六年の斉彬と小野嶋の動向について畑尚子氏が「斉彬は同年五月二日に江戸を発ち六月二日に鹿児島に到着する。篤姫の鶴丸城への引移りについては、自分の参勤交代に伴い江戸から鹿児島に向かった小の島・園川ら女中の到着前である六月初旬を指示している」（『幕末の大奥』七九）と指摘するように、小野嶋は斉彬の出発以前に篤姫の許へ向かった。そして篤姫は嘉永六年八月二十一日に薩摩を^た発ち慶喜擁立の密命を熟知した小野

嶋と共に伏見の近衛忠熙^{ただひろ}へ参殿し、十月二十三日に芝薩摩藩邸へ到着した。長い陸路の道中、篤姫が小野嶋から大石寺信仰の内容を聞く機会が多かった事は想像に難くない。

かくして小野嶋から教化を受けた篤姫は、斉彬が江戸へ戻った嘉永七年八月に日英上人から大石寺の常住曼荼羅本尊を授かった。すなわち同年十月十五日付の日英上人書状には「薩州様二も弥当流御帰依二相成八月薩州様八ノ戸様江同日奉書写之御兄弟御本尊と御唱御座候由。太守様並御姫様御四人様へ同御符奉差上候事二相成候。頓而御姫様ノ内篤姫様と申御方当將軍様江御入輿に可相御座趣御座候。此御方様江ハ太守様御意ヲ以御守並常住御本尊も奉差上方便品自我偈廻向文御書拔書等も奉差上候」(『諸記録』十一二三八)とあるように、日英上人は「斉彬と信順に御兄弟御本尊(大石寺曼荼羅)を下附し、娘四人(篤・暉・典・寧)には秘護符を授けた。特に入輿直前の篤姫には斉彬の意向で守本尊と常住曼荼羅を授与し、方便品・自我偈・回向文・日蓮大聖人御書の抜粋も差し上げた」と記している。

大地震を経た安政三年(一八五六)十二月十八日に篤姫の輿入が成就した後、斉彬から日英上人へ初穂金子百両が奉納されている。この史実は文久二年(一八六二)六月十五日に、日英上人自ら書写した大石寺富士見庵(旧遠信坊)安置の常住板本尊裏書に「嘉永六丑年薩州候祈願蒙御帰依安政三辰年十一月薩州御姫君御現名篤姫君御薙髮後天璋院殿御城入首首尾能就」

『諸記録』一一一一三)と謹刻されている。小野嶋の言上で斉彬が帰依に至った蓋然性は衆目の一致する所であるが、右に明かなように、嘉永六年に篤姫の御台所輿入の祈禱願を縁として大石寺信仰に帰依したのである。しかし一体誰が斉彬に大石寺門流への祈願帰依を強く勧めたのかは、不思議にも他の日英上人書状にも、幕府の宗教政策への配慮の為か、一切詳らかにしていない。

一方、嘉永七年八月に「御兄弟御本尊」を受持した南部信順の帰依については、同書に向島常泉寺檀家の高野周助から大石寺信仰の内容を細かく聞き及んだ様子が「誠二高周之丹精言語二難述程之事二候。殿様江も御教化申上候処弥御信仰二相成当八月中御本尊御願ニて奉差上候」(『諸記録』十一二三七)と書かれている。

三 天璋院からの万延元年の天下安全祈禱願

ところで篤姫が入輿の後、御台所にあった時期の大石寺信仰を伺う書状は、在位期間が家定薨去と斉彬逝去の重なる安政五年七月までの僅か一年半であった為、家茂が徳川十四代將軍を継承した後の万延元年まで、管見に触れた資料は乏しい。しかし別稿に述べたように落飾して天璋院となった篤姫は、相繼ぐ江戸城火災、桜田門外の変等の世情不安の続く江戸周辺の天下安全の為、万延元年三月十四日に祈禱願と法華經書写を日英上人に願い出ていたのである。この祈禱願の内

天璋院篤姫と法華信仰（長 倉）

一四二

容は前掲した日英上人の万延元年十月の『時々興記留』に記されていた。しかも祈禱願の史実を裏付ける書状として、万延元年十月十一日付で小野嶋の代筆による日英上人へ宛てた篤姫の礼状二通兼寄附目録（『常泉寺文書』曾存書）が判明した。

まず一通目には同年十月の常泉寺御会式の砌、天璋院は葵兩御紋入り青地金襴水引（竪二間半横二間一丈）と供養料百兩を奉納し、日英上人個人へ料紙硯、袈裟衣、昆布料を供養したと綴られている。また日英上人の法華經書写本に感嘆した篤姫が、側近の局や老女にも披露し、幾久しく大事に納めるように話した大奥での逸話にも言及している。とりわけ、二通目の書状に「天璋院からの供養品は内々にとの言い付けで表向には薩奥からの体裁を取るべきだが、過去の先例（天英院）に倣って天璋院からの常泉寺への供養を表向にしたいと局（幾島）に願ひ出た所、局から御表御用掛に命じておくので天璋院の供養であることを表向にして下さい」と記した点が重要である。通常、篤姫の書状は局の代筆か御表使名で出されることから、薩奥大年寄の小野嶋に天璋院の礼状代筆を願うことも極めて稀である。また小野嶋自身も当時の政局不安と薩奥の奉公に忙殺され、御礼に伺えないもどかしさを吐露するなど、日英上人と小野嶋の師檀関係の深さも明らかであろう。この書状は当時の大奥と薩奥との深い関係を雄弁に物語る資料であると共に、斉彬亡き後も篤姫が小野嶋を頼りに大石寺信仰に励んだ姿が偲ばれる。

四 天璋院の家茂上洛無事帰城願と清水純崎

さらに文久三年（一八六三）七月二十一日付の日英上人書

状には「公方様還御後之別而世間も穩ニ相成難有事ニ御座候御上洛御安全之御祈念二月中被仰付還御迄無怠転奉懇祈候処此節為御初穂金拾五兩御本丸御手元より納領ニ相成尚更天下泰平之御祈念申上旨被仰付実ニ門流之冥加難有事ニ御座候追々御帰依被為付候御事ニ可有之候還御後も御所勞無之様御護符百葉奉献上之候」（『諸記録』十九―二二）と、天璋院が日英上人に家光以来の二三〇年振りの家茂の上洛に際して、江戸への無事帰還の祈禱を願ひ、家茂帰城の後、天璋院から日英上人に手許金十五兩が奉納され、更に天璋院に秘護符を授けたと綴っている。

この背景は、文久三年四月下旬の天璋院自筆の家茂宛書状に「きびしく信心のミいたし、御帰城之所祈りくまいらせ候、其の御地ニ而も御一大事之事ゆへ御信しんたい一と存まいらせ候」（『天璋院篤姫展釈文一覽』九）とあり、また文久三年六月頃の徳川家茂宛・天璋院自筆書状に「日々内寄御うへ申上、信じんのミ致し、御帰城祈りくまいらせ候」（同）とあるように、天璋院が家茂の無事を「信心第一」に祈念した姿に明らかである。

ところで小野嶋が斉彬の遺児を連れ立って薩摩へ帰国した期間、文久三年の祈禱願を日英上人へ取り次いだ人物は、常在寺講中で常泉寺墓檀家の清水純崎（崎太郎・嘯太郎・孝蔵）と考えられる。その理由は純崎は文久元年頃には御徒目付で

あったが、同年四月十九日には「別段の訳を以御勘定格」を兼務した（『続徳川実紀』四一六九）。とりわけ、文久三年の家茂二度目の上洛に際して純崎は御細工番頭を務め、十二歳の長男・純孝を伴って上洛道中の一切の下準備を取り仕切った。

家茂は帰城後の元始元年（一八六四）五月二十八日に、純崎を和宮や天璋院の御広敷番頭に抜擢し（同六七三）、同年九月二十八日には純崎と純孝に謁見し、上洛道中の労を褒賞している（英名アリ勘定格ヨリ細工頭格ニ進ミ永世拝謁以上ト班シ御廣敷番ニ陞ル十四代將軍家茂公ニ値遇シ其上洛ノ際専ラ其事ニ幹タリ道途ノ警備ヨリ朝参儀仗ニ至ルマテ事細大トナク純崎ノ裁断ニ決ス）『清水家系譜』参照）。したがって同年八月付の日英上人書状に「大奥向若君様姫君様奉始重御女中方ニも追々被成御信心候由弥大法廣布難有事ニ存候」（『諸記録』九一八七）と日英上人は純崎や江戸に戻った小野嶋から、家茂、和宮、奥女中も大石寺信仰に結縁した様子を仄聞し「大法広布」を感嘆している。

五 むすびに―幕末期の大石寺信仰の展開―

最後に天璋院が家茂を大石寺信仰へ教導した様子について、他藩に風聞された証左を指摘しておく。尾張藩の鷹匠頭・御台所頭の家柄にあった大石寺檀越^{だんのつ}の富田金平（寿永）の母（妙寿）と叔母（妙栄）が認めた元始元年（一八六四）の「呈上御簾中様大奥御老中様添側御披露」と題する諫曉書を掲げる。

天璋院篤姫と法華信仰（長 倉）

本書状は、天保時代から尾張藩北在で断続的に惹起していた大石寺門流への弾圧（尾張法難）停止を嘆願した書状である。そこに「天璋院様深く御帰依ましく公方様ニ御信仰仰被為有候との御事」（『諸記録』九一二〇〇）と大政一新の前後、天璋院が深く大石寺門流に帰依し、家茂を教化した状況が読み取れる。おそらく表向にも天璋院及び家茂周辺の大石寺門流への帰依は周知であったのだろう。当時の幕府大奥を始め、諸藩奥の大石寺信仰の宣布について、大石寺五十二世日露上人は「当節御本丸又ハ一橋御殿其外奥向ニ屯両人ツツ当流信仰之女中方有之由ニ候間結縁流布致させ度平かな和解之文にて当門之大略を書上候」（『諸記録』十三一七四）「御状云別頭根源抄（中略）拙子も手つるを以て水戸前中納言殿御母公又ハ御本丸重立候女中方へも差出」（同二三五）と、江戸城御本丸や一橋御殿、他藩の大石寺門流に帰依した女中方に平仮名の信仰入門書（『別頭根源抄』^{べつずこんげんしょう}）を認めたと記している。かかる状況からも天璋院篤姫を中心とした幕末の大石寺信仰の展開には、更なる検討が必要であろう。

【細註略】拙稿「篤姫の信仰と小野嶋の実像」（『別冊歴史読本・天璋院篤姫ガイドブック』二〇〇八年・新人物往来社）もあわせて参照頂きたい。

〈キーワード〉大石寺信仰、日英上人、天璋院篤姫、島津斉彬、

南部信順、薩奥大年寄小野嶋

（大正大学総合仏教研究所研究員・博士（仏教学））